

第3回神戸市立工業高等専門学校の今後のあり方検討委員会

議事要旨

1 日時 令和3年6月1日（火）10:00～12:11

2 開催方法 オンライン開催

（事務局設置場所:教育委員会会議室/神戸ハーバーランドセンタービル ハーバーセンター4階）

3 議題

- (1) 第2回会議の振り返り
- (2) 課題解決と理想の将来像の実現に向けて

4 委員の主な発言

- (1) 第2回会議の振り返り について

事務局から先行して法人化された国立大学法人の運営費交付金の状況等を説明し、神戸市立工業高等専門学校（以下「神戸高専」）を地方独立行政法人化した場合の課題・留意点などについて協議を行った。

（主な意見等）

（国立大学における法人化の状況・課題等）

○国立大学の法人化は、大学が運営について主体的に計画をつくり、目標を定めて取り組めるように、また、大学で一体的に運営ができるように運営組織の改革と合わせて実施したもの。収入を国からのお金に頼っているという点で、資金面のコントロールが課題になっているという状況。

○競争的資金獲得や中期目標は、最終的に指標で評価されるため、目標の設定自体が難しい。論文登録数や海外研究者との論文増加数などを横並びで競って、進捗が良くないと予算が減額されるため、教育や研究に相当なプレッシャーがかかる。このような教育・研究をしたいということがなかなか許されない状況だ。

○国立大学法人化以降、共同研究などに充てられる競争的資金の額は増えたが、研究論文数そのものや、世界的にインパクトを与えられるような論文数が減少するという事態も生じている。若い研究者が安心して自由に研究できる環境について、危機感を持つ教員もいる。

（神戸高専と他の大学法人を一体運営する際の留意点）

○制度開始当初から減額した予算を競争的資金として配分したが、競争的資金獲得に向かない大学は運営が難しくなるということもある。この点は今後神戸市が教育機関にどのように予算配分していくかで状況は違おうだろう。

○国立大学法人の事例では、それぞれ地域との関係や研究内容、教育内容が異なる中で国が特定の指標で評価して資金を分配することに難しさがある一方で、今回の神戸市の事例では、市が高専と公立大学法人の思いを確認しつつ、市としてどのような教育・研究を望むのか議

論できるという点で、先行する国立大学法人の抱える課題に対応できるのではないかと感じる。

- 国立大学法人化で良かった点は、株式会社の設立が可能になったこと。積極的な大学は、国に競争的資金を申請しなくても違うお金を獲得して運営できるようになっている。一方で大学そのものが株式会社化した訳ではないので、お金の使い方は大学の会計基準に縛られる。現場では縛られた状態で自助努力を迫られるのが苦しいところだ。神戸高専の地独法化を設計する際は現場の苦勞、課題が余り生じないような形で、合わせて外部資金の獲得についても方策を考える必要がある。
- 高専の教員は、教育と研究の両方が求められるのだが、教育に比重を置いた場合は大幅な節約や競争的資金・外部資金の獲得に労力を割くのは、今の高専の規模では難しい。予算削減の視点で検討する場合には、公立大学法人との一体運営における間接経費の削減についても議論する必要がある。
- 今回の検討・議論に関する神戸市のスタンスは、行政改革の観点ではなく、市が保有する高等教育機関をより魅力的で、今の時代に合った形に発展させていくためにどうあるべきか検討したいということだ。
- 学生の入試倍率や就職率を見ると数年で問題が生じるようには感じないが、将来を考えた際にやはり課題はある。今後も高専を大事にしていくのなら、今ある選択肢の中でやれることをやってみるのが重要だ。万一違えば軌道修正すればよく、何もやらないといことが一番よくない。
- 外部資金の獲得について、国立大学では法人化後、学部間の連携を進めて特許等を単なる情報公開に留まらず、組織的に売り込む活動を行っている。海外では大学が学部横断的にコンソーシアムをつくって企業を呼び込んで資金を獲得する事例もあり、今回検討している高専と大学の枠組みの中で、神戸市でも大学が産業界と学部横断的なコンソーシアムを構築してイノベーションデザインを取り入れた活動が出来れば、教育・研究、産業界への貢献に関して何か新しいものが生まれるチャンスになり得る。
- 学校が一緒になるという点において、通常は補完関係やシナジー効果を期待するのだが、単純に1足す1が2にならない世界だ。神戸市看護大学の状況はよく分からないが、現時点で神戸高専が就職等の社会的な需要に対して強い存在でいられることに対して、神戸市外国語大学は世の中の動きとして、社会的なポジションを見つけていけないといけない状況だ。大学が持っている教育のリソースが、高専と一緒にすることで本当に融合できるのか、教員リソースをどうするのかなど、かなり難しい部分が出てくる。
- 一体運営する大学法人が示している改革の方向性と、本検討委員会でこれまで検討して提言された神戸高専の方向性が上手くマッチすることが重要だ。抽象論で終わらずに、具体的にどうなのかという懸念が生じる。

(その他/理想の将来像の実現に向けて)

- 自治体が大学の予算を議論する際、研究の内容を理解・評価して交付金を算定することが難しいという問題意識がある。一方で予算の上限を定めて現状の予算から決まった割合を動かすということでは、運営について大きな変革ができない。
- 多様性に関して、高専の生徒はやはり男子が多く、女子が少ないイメージを払拭できない。文系・理系に捉われずにデータアナリストを養成する学部を設けて企業連携を進め、教育と

研究の両方で成果をあげている事例もある。今後は文系・理系の枠や男女の性別の枠を超えるような教育研究の在り方を検討していくことが重要だ。

(2) 課題解決と理想の将来像の実現に向けて について

神戸高専の地方独立行政法人化には、制度上、大学法人との一体運用が必要となることから、事務局より神戸市立の2大学、神戸市外国語大学（以下、「神戸市外大」）と神戸市看護大学（以下、「神戸市看護大」）について各大学の取組概要等の説明を行い、優先的に検討すべき一体運営の相手について協議を行った。

(主な意見等)

(優先的に一体運営を検討すべき相手について)

- 神戸高専と神戸市看護大・神戸市外大との教育研究内容での親和性があるのか、一体的に運営するメリット・効果を検証する上で、教育研究内容の重なり、類似性等を事前に確認しておく必要がある。
- 神戸市外大のコース制は非常におもしろい。高専の学生には国際化という意味で英語に限らず是非語学力を身につけてもらいたいが、コース制では法律・経済などが学べることも含め、両大学の概要を見ると、親和性は神戸市外大の方が大きいと感じる。
- ジェンダーの視点では、それぞれに偏りがみられる。本来はバランスのとれた状態が理想であって、そのような状態に収斂されると思われるが、まずは違うもの同士が一緒になって形式上ジェンダーフリーの状態を作ることにも意味がある。
- 神戸市看護大と神戸市外大で唯一置かれている状況が違うのが、卒業生が直面するマーケットだ。神戸市看護大は1億人の日本のマーケットで現在も存在価値があり、今後も高まるだろう。一方、神戸高専と神戸市外大の卒業生は、正直日本の1億人のマーケットだけではなく、例えば東南アジアを含めた約6億人、そういう海外のマーケットで活躍していかなければ、自分たちのやりたいこともできない。そのような学生が直面するマーケットという視点では、神戸高専は神戸市外大と重なるところがある。
- 高専の地独法化に伴う大学との一体運営は、合併ではなく同じ法人の中に両校が存在する状況になる。せっかく同じ傘の中に入るのなら、何らかのシナジー効果を求める事になるのだが、高専と教育課程が全く違い、やっている内容も違っているところを一緒にしてシナジーを出すことは相当難しいことでもある。どこをターゲットとして、どのような人材育成を目指すのか、どこを目標として設定するのか、はっきりさせないといけない。
- グローバル化と情報化が進む社会で仕事をしていく上で、高専の学生にとって世界の共通言語としての英語は必須、一方で外大の学生にとっても各種ソフトの使い方やその基となるプログラミングの考え方など情報化の基本的な知識がないと、グローバルな世界ではかなり競争力が落ちてしまう。
- 語学とデータサイエンスの重要性がいわれる中、文科省の方針で普及が進み、多くの大学で情報教育が始められている。既に色々な大学が戦略的に進めている中では、神戸高専と神戸市外大が同じ法人に入る際に、どのようなリソースを共有できて、どうすれば効果的なのかと言う点が重要だ。例えば、神戸高専の中に英語による教育コースを設けたり、専攻科の学生が外大の特殊言語の授業を受講できるなど、特色を戦略的に打ち出さなければ強くなれない印象がある。
- 神戸市外大の持つグローバルネットワークを神戸高専が徐々に活用していくことが期待でき

る。ネットワークにあるいくつかの大学を知っているが、自分が関わった大学では国際的な語学教育の横で、最先端の情報科学・AIの研究、産学連携によるスタートアップの育成が行われていた。是非、このネットワークの活用を進めて欲しい。

- 高専と大学の一体運営の検討には、市としてのビジョンを確認し、その実現に有益なシナジー効果を検討する必要がある。その場合、高専にとってのメリットとともに、大学にとってのメリットも考えていくことが必要だ。

(その他/理想の将来像の実現に向けて)

- 現在、企業に依頼して出してもらえる課題は、多様性を持った形で学生達に取り組んでもらうことで新しいアプローチが生まれ出せると期待している。この観点からは、神戸高専に加えて神戸市外大、神戸市看護大の学生が入り交じった教育プログラムを組み、そこに企業が入ってサポートいただくシステムが出来れば、新しい方向で教育が進む可能性がある。その際、一番大きな問題が指導してくれる人材だ。現状、多忙な状況下で新しい取組を始める負担が非常に大きい。
- 市の必須の業務ではない大学・高等教育機関の運営に多額の予算を投じることは、市民にその理由を説明できなければならない。予算投入の大きな理由として、人材輩出などによる地域貢献と市全体のブランド化への貢献があるが、そのためには市がどこを目指していて、そこに高専や大学がどういう効果をもたらすことが可能なのか、きちっと整理していく必要がある。
- 今後 10 年間で、情報関連技術や産業・グローバル化は劇的に進んでいくだろうが、それらがある程度示した上で、市の国際情報都市の 10 年・20 年のビジョンを示し、その中で神戸高専・大学の道筋を示すことが必要と感じる。かなり難しいことだが、色々な調査をした上で示すことになるので、その過程で説得力を持った戦略が出てくればよいと思う。